

Title	08 北白川宮能久親王の御遺跡と神社の造営
Author(s)	金子, 展也, Kaneko, Nobuya
Citation	海外神社跡地から見た景観の持続と変容: 67-76
Date	2014-03-20
Type	Research Paper
Rights	publisher

北白川宮能久親王の御遺跡と神社の造営

金子展也

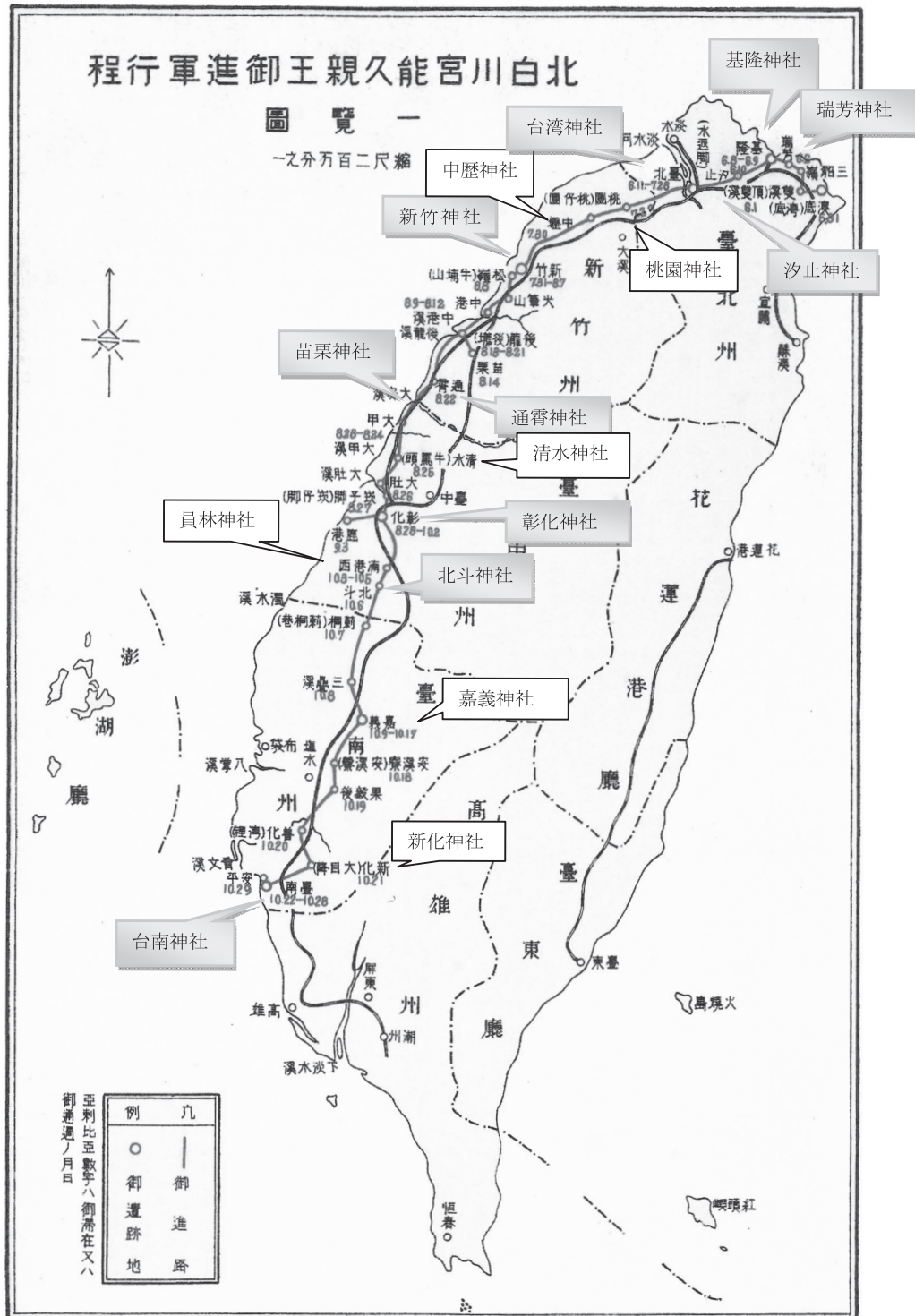


図1 北白川宮能久親王進軍工程一覽圖（出典：北白川宮能久親王御遺跡）

※注 地図上の神社名の記載は筆者による

地図上の神社は「御遺跡地」に建立された神社を示す。グレーがかった吹き出しで示した神社が今回の調査対象神社である

1 研究のテーマ

明治27(1894)年、日清戦争が勃発し、日清講和条約締結により、台湾および澎湖列島は日本の領土となる。台湾の日本への割譲に伴い、台湾守備の命令を受け、明治28(1895)年5月22および23日、近衛師団第一次輸送部隊(師団長能久親王、歩兵一旅団、騎兵一中隊、野砲兵一大隊、機関砲4門、工兵一中隊、輜重しちゆう)が旅順および大連を出発する。当初は、基隆または淡水付近を上陸予定としていた。しかし、淡水には嚴重に水雷が河口に敷設されており、陸上の防備も頗る堅固であり、基隆への上陸も相当な困難が想定された。その為、これらを回避し、5月29日、近衛師団を乗せた薩摩丸他15隻の運送船さんしやうかくは三貂角の海岸東方約1kmの沖合に錨を下ろし、師団長北白川宮能久親王が塩寮付近に上陸したのは2日後の31日午前7時であった。一般にいわゆる澳底おうていである。この日から台湾の西部を南下し、台南城に入城するまでの約5ヶ月間に渡る「平定の戦い」が始まる。

台湾には日本の侵略に反対する抵抗勢力が各地にあり、各地で壮絶な戦いが展開された。しかしながら、近衛師団を悩ませたのは、これまで体験したことが無い台湾特有の湿気をもった暑さと非衛生的な環境であった。このため、能久親王も嘉義あたりでマラリアに罹患し、遂に10月28日、台南で逝去する。

澳底に上陸後、最終的な目的地である台南城までの行程で37ヶ所に舎営所、駐営所、露営所、休憩所や指令所が設けられた。そして、それぞれの多くには「御遺跡」として記念碑が建立され、民間の舎営所は保存・管理がなされた。また、昭和10(1935)年12月5日(台北駐営所および八卦山指令所は昭和8年11月26日)、中川総督は史蹟名勝天然記念物保存法により、史蹟としてこれらの「御遺跡」を指定した。

同時にこれらの「御遺跡」の大部分の場所に記念碑とは別に神社が造営されているが、それぞれの神社造営に関して、能久親王の「御遺跡」が深く関わっている事実はこれまで指摘されていない。本調査

では、北白川宮能久親王がたどった「御遺跡」の地に造営された神社の中で、「御遺跡」との関連性と必然性が何らかの形で認められた神社についてのみ考察する。

2 北白川宮能久親王とは

弘化4(1847)年に伏見宮邦家親王の第9皇子として生をうけ、安政5(1858)年、仁孝天皇の猶子ゆうしとして11歳で親王宣下する。この時諱を「能久」と賜る。日光の輪王寺に入寺得度とくどし、公現入道親王と名乗る。戊辰戦争の時、幕府側に付く。彰義隊に担がれて上野戦争に巻き込まれたが、その敗北により東北に逃避、仙台藩に身を寄せ、奥羽越列藩同盟の盟主に擁立された。明治元(1868)年9月、仙台藩は新政府軍に降伏し、公現入道親王は京都で蟄居ちつきよを申し付けられ、伏見宮家預かりとなる。その後、一時僧門に入るが、明治3(1870)年に還俗して伏見宮に復歸、軍籍に身を置くようになる。ドイツにも留学し、兵学を学び、留学中の明治5(1872)年に北白川宮を相続する。帰国後は陸軍中將にまで進む。

3 北白川宮能久親王の御遺跡と神社造営

(1) 澳底から台北へ

近衛師団が上陸した同日、初代台湾総督樺山資紀すけのりの命により、「この地に我が国皇族として最初に上陸し、露営した地点」として「近衛師団長陸軍中將



写真1 澳底の記念碑。現在は「塩寮抗日遺址」となっている

【台北州】

日付	出発	到着	御遺跡	記念碑および神社の建立
M28.5.31		澳底	澳底（露營）	明治 29 年 4 月、樺山総督の命により勝利品の砲身を改鑄して砲弾型の銅標を建立
M28.6.1	澳底	頂雙溪	何慶宅（民家）	
M28.6.2	頂雙溪	瑞芳	旧砂金局公館	明治 31 年 4 月、瑞芳守備第二中隊による記念碑建立。昭和 9 年に改修 瑞芳神社
M28.6.3	瑞芳	円窓嶺	田寮峠（御遺跡峠）	明治 44 年 10 月、台湾神社 10 周年大祭に際し、基隆重砲兵大隊将校団が基隆攻略の指令所としての場所に記念碑を建立
	円窓嶺	基隆	旧兵営、旧海関	昭和 8 年、基隆市聯合青年団による記念碑建立 基隆神社
M28.6.10	基隆	水返脚（汐止）	蘇樹森宅	大正 11 年、御遺跡の保存を図り、昭和 5 年、建物と土地を買収して御舎當所となす 汐止神社
M28.6.11	水返脚	台北	旧布政使衛門	昭和 10 年 10 月、記念碑の建立 台湾神社

表 1 台北州での進軍行程

大勲位能久親王幕営之地」と謹書された標木が建てられた。翌年、砲弾型の銅標に替えて、北白川宮征討記念碑とした。これが、現在も澳底に残る記念碑である。

明治 28（1895）年 6 月 1 日朝、基隆攻略に向けて澳底を出発する。

ずいほう
瑞芳神社

鎮座日：昭和 11 年 7 月 10 日

祭 神：大国魂命、大己貴命、少彦名命、能久親王、
天照皇大神

例祭日：7 月 10 日

社 格：無格社



写真 2 往時の瑞芳神社（提供：大村博教）

鎮座地：基隆郡瑞芳庄龍潭堵 102 之 7

現住所：新北市瑞芳区瑞芳街 106 号（国立瑞芳高級工業職業学校の裏）

昭和 8（1933）年末、瑞芳神社建立に関する検討がなされ、州当局に申請を行う。地鎮祭は明治 31（1898）年に建立された北白川宮殿下御遺跡地記念碑の建て替えと同時に昭和 9（1934）年 8 月 22 日に挙行され、昭和 11（1936）年 7 月 10 日に鎮座した。

キールン
基隆神社

鎮座日：明治 45 年 3 月 9 日

祭 神：大国魂命、大己貴命、少彦名命、能久親王、
天照皇大神、大物主神、崇徳天皇

例祭日：6 月 3 日



写真 3 往時の基隆神社（提供：広繁喜代彦）

社 格：県社

社 歴：大正4年11月7日、金刀比羅神社から名称
変更、昭和11年3月25日県社列格

鎮座地：基隆市義重町

現住所：基隆市中正公園（忠烈祠）

讃岐金刀比羅神社よりご分霊を勧請し、金刀比羅神社として建立されることになった。明治43（1910）年11月、地鎮祭を終え、金刀比羅神社600年祭が執行された明治45（1912）年3月9日に鎮座した。そして例祭日を北白川宮能久親王基隆攻略の日である6月3日とした。

大正3（1914）年5月に基隆神社と改称され、祭神も天照皇大神、開拓三神（大国魂命、大己貴命、少彦名命）と能久親王が増祀され、大正4（1915）年11月7日に基隆神社の鎮座式が執り行われた。

県社昇格に向け、昭和10（1935）年3月に県社昇格請願文が総督府および州当局に提出され、翌年の3月25日に県社に昇格している。昇格に際し、再度大祭の日取り変更が氏子総代で協議され、過去10年間の統計により最も雨の少ない日が調査された。そして、これまでの大祭の1ヶ月遅れの7月3日と決定した。一旦は7月3日に決定した大祭日であったが、昭和11（1936）年の大祭日は県社昇格ならびに鎮座25周年を兼ねた特別な処置であり、総督府はじめ監督官庁は今後の大祭はこれまで通りの6月3日とすべきとの意向もあり、結局、従来通り北白川宮能久親王入城記念の6月3日に大祭を執行することになった。



写真4 往時の汐止神社（出典：敬慎）

しおどめ
汐止神社

鎮座日：昭和12年12月15日

祭 神：天照皇大神、大己貴命、倉稲魂命、明治天皇、能久親王

例祭日：6月10日

社 格：無格社

鎮座地：七星郡汐止街汐止字汐止

現住所：新北市汐止区公園路7号（忠順廟）

基隆を占領した後、台北入城の前夜、北白川宮能久親王は6月10日に台北州七星郡汐止街汐止の水返脚（その後の汐止）に滞在した。舎宮所は蘇樹森が新築した家屋。能久親王が南で逝去された後、総督府はこの場所を「御遺跡」として保存し、「能久宮」と呼んだ。汐止街は昭和5（1930）年3月10日、蘇家からこの建物および敷地を買収し、能久親王が滞在した6月10日を記念日として定め、毎年祭典を挙行していた。

汐止街は能久親王の「御遺跡」であり、また国民精神作興および敬神崇祖観念を強調するために、汐止街の官民有識者の間で昭和9（1934）年5月に汐止神社建立の奉賛会を組織することになった。この期間中、祭神を天照皇大神・大己貴命・倉稲魂命・能久親王の4柱とし、「御遺跡」隣地の所有地を買収し、同時に「御遺跡」を修繕し、汐止神社を創立することになった。昭和12（1937）年6月10日、地鎮祭が執り行われ、能久親王が滞在した6月10日を例祭日と定め同年12月15日に鎮座祭が執り行われた。

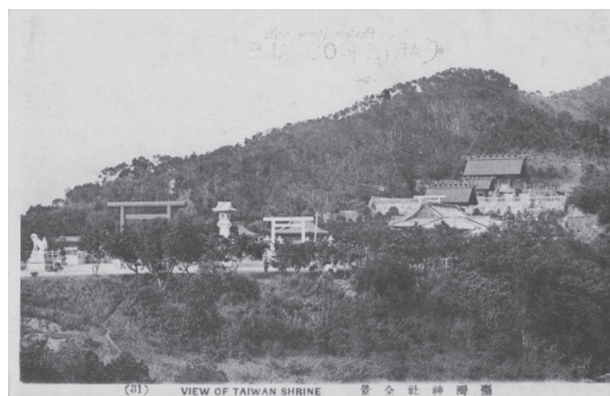


写真5 往時の台湾神社

台湾神社

鎮座日：明治34年10月27日

祭神：大国魂命、大己貴命、少彦名命、能久親王、
天照皇大神

例祭日：10月28日

社格：官幣大社

社歴：明治33年9月18日官幣大社列格、昭和19
年6月17日神宮改称

鎮座地：台北市大宮町

現住所：台北市中山北路4段1号（圓山大飯店）

明治28（1895）年11月5日、宮内省告示第15号により北白川宮能久親王の御遺跡が発表された。

明治30（1897）年9月1日、第3代乃木総督は故北白川宮能久親王を祀る神社建設の為に故北白川宮能久親王神殿建設取調委員会を設け、神社造営位置の選定、神社設計および費用予算を編成する一方、その設計を内務省に囑託した。建立地は台北・基隆および台南が候補として挙げられ、最終的に台北が選ばれ、当時の城外である圓山が選定された。しかしながら、乃木総督の転任となり、明治31（1898）年、第4代兒玉総督の時代に圓山から劍潭山に変更された経緯がある。

「別格官幣社を臺灣に建設する建議案」が明治33（1900）年9月18日に衆議院で可決し、同日に西郷従道より内務省告示81号が告示され、台湾神社は



写真6 往時の新竹神社（出典：神奈川大学海外神社（跡地）に関するデータベース）

「官幣大社台湾神社」として創建されることが決まった。これにより、大国魂命、大己貴命、少彦名命を一座、能久親王を一座とする台湾神社の造営と基隆河の架橋を含めた大工事が開始されることになった。鎮座日を明治34（1901）年10月27日、例祭日を能久親王薨去日である10月28日と設定し、約2年半に渡る造営工事の末、海外における初めての官幣大社、そして台湾の総鎮守としての台湾神社がついに竣工した。

(2) 台北から通霄へ

新竹神社

鎮座日：大正7年10月25日

祭神：大国魂命、大己貴命、少彦名命、能久親王
例祭日：10月28日

社格：国幣小社

社歴：大正9年2月17日県社列格、昭和17年11

【新竹州】

日付	出発	到着	御遺跡	記念碑および神社の建立
M28.7.29	台北	桃園	蔡路宅	昭和12年3月、記念碑の建立
M28.7.30	桃園	中歴	仁海宮	昭和7年、中歴青年団の発起により記念碑建立
M28.7.31	中歴	新竹	潜園内爽吟閣	昭和8年、新竹神社に移設する 新竹神社
M28.8.8	新竹	松嶺	露營	明治29年3月、記念碑の建立
M28.8.9	松嶺	中港	陳汝厚宅	
M28.8.13	中港	後龍	盧錦山宅 將軍山指令所	大正3年、新竹庁長家永泰吉郎により記念碑建立 苗栗神社
M28.8.22	後龍	通霄	湯鴻文宅	昭和12年、記念碑の建立 通霄神社

表2 新竹州での進軍行程

月 25 日国幣小社列格

鎮座地：新竹市客雅

現住所：新竹市松嶺路 122

大正 5 (1916) 年 5 月、新竹庁下 33 万人の敬神観念を涵養せしむるために新竹街の松本徒爾他 47 名によって台湾神社の分霊を祀る県社新竹神社建立申請が台湾総督府になされた。造営場所を北白川宮能久親王の御遺跡地である牛埔山に選定し、北白川宮能久親王の舎営所でもあった爽吟閣は同神社内に移築し、記念造営物として永久に保存することに決定した。

大正 7 (1918) 年 9 月 16 日に上棟式が行われ、同年 10 月 25 日に鎮座式が挙行された。

7 月 31 日、新竹に到着した能久親王は当時、台湾でも 8 景の 1 つに数えられた林達夫の邸宅である潜園の爽吟閣に静養をかねて 8 月 7 日まで滞在している。8 月 8 日に爽吟閣を出発し、枕頭山および鶏卵の抵抗勢力を排除し、牛埔山の丘陵地帯に天幕をはり、ここを露营地とした。現在の新竹市立成徳高級中学である。

びょうりつ 苗栗神社

鎮座日：昭和 13 年 11 月 4 日

祭 神：明治天皇、大国魂命、大己貴命、少彦名命、
能久親王

例祭日：11 月 4 日

社 格：県社

社 歴：昭和 20 年 4 月 12 日郷社列格

鎮座地：苗栗郡苗栗街苗栗 717 番地

現住所：苗栗市福星里福星山 15 隣 1 号 (苗栗県忠烈祠管理所)

大正 12 (1923) 年 5 月、皇太子殿下 (後の昭和天皇) の行啓記念として苗栗神社を造営することになった。造営場所は苗栗街を一望できる風光明媚な將軍山の山腹で、能久親王がこの地に苗栗指令所を設置して討伐の指揮を執った能久親王の「御遺跡」でもあった。

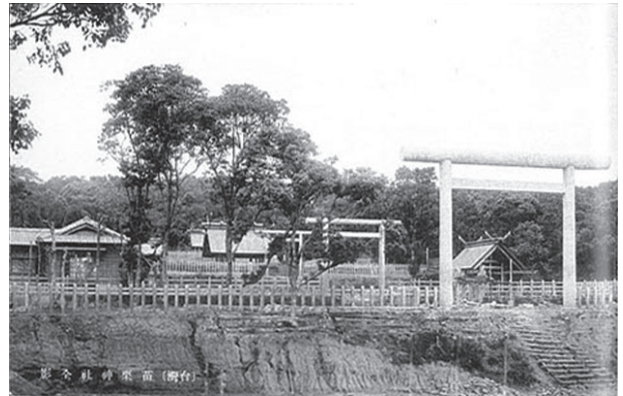


写真 7 往時の苗栗神社 (出典：神奈川大学海外神社 (跡地) に関するデータベース)



写真 8 現在の「將軍駐馬之碑」。石碑には「丘滄海先生紀念碑」と書かれている



写真 9 従来の石碑の先端部

当初の計画から大幅に遅れ、昭和 13 (1938) 年 2 月 4 日に上棟式を終え、同年 11 月 4 日に鎮座祭が執り行われた。

明治 33 (1900) 年 5 月に苗栗守備隊がこの將軍山にあった苗栗指令所に標柱を立てて御遺跡を表示したものを、大正 3 (1914) 年に新竹庁長家永泰吉郎の提案で記念碑を建立したものである。その記念碑には「將軍駐馬之碑」と題し、新竹神社社司吉野利喜馬が撰文したものである。現在、残る記念碑の一部は昭和 2 (1927) 年に自然石に改められたもので

【台中州】

日付	出発	到着	御遺跡	記念碑および神社の建立
M28.8.23	通霄	大甲	文昌廟	昭和9年、記念碑の建立
M28.8.25	大甲	牛罵頭 (清水)	蔡仁卿宅	
M28.8.26	牛罵頭	大肚	礪溪書院	
M28.8.27	大肚	崁子脚	露營	明治33年、休憩所(福興宮)前に標石を建て、台湾神社遙拝所を建立
M28.8.29	崁子脚	彰化	八卦山指令所 旧台湾府衛門	大正3年、彰化支庁長河東田義一郎による記念碑の建立。昭和11年12月、御駐營記念碑の建立 苗栗神社
M28.10.3	彰化	湳港西	陳有光宅	昭和9年、記念碑の建立
M28.10.6	湳港西	北斗	許從龍宅 (梅亭書房)	昭和10年、記念碑の建立 北斗神社

表3 台中州での進軍行程

ある。

つうしょう
通霄神社

鎮座日：昭和12年1月25日

祭神：天照皇大神、能久親王

例祭日：10月28日

社格：無格社

鎮座地：苗栗郡通霄庄通霄43番地ノ2

現住所：苗栗県通霄通西里虎山路(虎頭山)

地方民有志によりこの虎頭山の中腹に神社の造営に着手されたのは昭和10(1935)年頃であった。そして昭和12(1937)年1月23日に鎮座祭が執り行われた。

8月22日、後龍を出発した北白川宮能久親王率いる近衛師団は、当地の湯鴻文宅に宿泊している。その後、この御遺跡は土地所有者の寄付により記念碑

が建立されることになった。通霄神社の鎮座祭が執り行われた当日に、北白川宮殿下御遺跡記念碑の除幕式が同時に行われている。

(3) 通霄から北斗へ

8月28日、近衛師団は未明より行動を開始し、大肚溪を渡り、彰化に到着する。抗日軍は八卦山に砲台を築き、ここに立てこもり彰化城の守りの要とした。近衛師団とは壮絶な戦いが行われたが、軍事力で勝る近衛師団の勝利となる。そして、この地に八卦山指令所が置かれる。

しょうか
彰化神社

鎮座日：昭和2年7月17日

祭神：大国魂命、大己貴命、少彦名命、能久親王

例祭日：10月28日



写真10 往時の通霄神社(出典：台湾・国家文化資料庫)



写真11 往時の彰化神社(出典：神奈川大学海外神社(跡地)に関するデータベース)

社 格：郷社

社 歴：昭和2年7月17日彰化社として鎮座、昭和3年12月22日神社昇格、昭和12年11月4日郷社列格

鎮座地：彰化市南郭

現住所：彰化市卦山里卦山路1之2号（太極亭）

八卦山での交戦後、北白川宮能久親王は近衛師団司令部を旧台湾府衛門に置き、8月28日より10月2日に到る36日間駐営した。当時の彰化地区は最も衛生状況が悪く、マラリアなどの熱帯病で亡くなる者も多かったために、師団の静養を重視し長い間駐留した。

大正9（1920）年に彰化街の公園付近に3万円の寄付を募集して彰化神社を建立し、北白川宮能久親王の御神霊を奉祀する計画が持ち上がった。その後、計画が進まず、大正15（1926）年6月になって、やっと鎮座地を能久親王の「御遺跡」であり、彰化街を一望に見渡せる八卦山に建立することに決まった。そして、昭和2（1927）年7月17日、鎮座祭が執り行われた。

ほくと 北斗神社

鎮座日：昭和13年10月6日

祭 神：明治天皇、大国魂命、大己貴命、少彦名命、能久親王

例祭日：10月6日

社 格：郷社

社 歴：昭和19年8月6日郷社列格

鎮座地：北斗郡北斗街北勢寮



写真12 往時の北斗神社（提供：草野光喜）

現住所：彰化県北斗鎮大道里文宛路17（国立北斗高級家事商業職業学校）

北白川宮能久親王率いる近衛師団が彰化での長い戦いを終えて、員林郡の瀟港西經由で北斗に着いたのが10月6日であった。一泊の短い滞在であった。宿泊した当時の梅亭書房の地は昭和10（1935）年12月、史蹟として指定される。後にこの地は公園となり、北白川宮能久親王御設営之址の記念碑が建立された。

当時の北斗郡には神社がなく、国民精神涵養上遺憾であるとの理由で、昭和10（1935）年9月、当時の藤垣郡守により郡下教化上の聖地とし、敬神の觀念を養い国民精神を涵養するために、郡民の熱意と浄財により神社建立が計画された。昭和11（1936）年9月に移民事業の進展に伴い、事業を受け継いだ那須郡守の英断により造営工事に着手され、同時に神社建立の申請が総督府になされた。

能久親王が北斗に到着した同じ日の昭和13（1938）年10月6日を鎮座日、例祭日も同じ10月6日とした。

(4) 北斗から台南終焉の地へ

たいなん 台南神社

鎮座日：大正12年10月28日

祭 神：能久親王

例祭日：10月28日

社 格：官幣中社

社 歴：大正14年10月31日官幣中社列格

鎮座地：台南市南門町

現住所：台南市府前路

能久親王死後、台南での宿泊先であった豪商呉汝祥の民家は「台南御遺跡所」として管理された。明治32（1899）年11月、時の台南県知事磯貝静蔵および混成第三旅団長陸軍少尉高井高義が協議の上、「台南御遺跡所」として保存すべく、総督府に北白川宮能久親王臨終の地としての台南に台湾神社台南分社建立の計画が出された。明治34（1901）年12月下旬、総費用3万円で台湾神社遥拝所のような形で

【台南州】

日付	出発	到着	御遺跡	記念碑および神社の建立
M28.10.7	北斗	荊桐巷	林本宅	大正3年、記念碑の建立
M28.10.8	荊桐巷	三疊溪	劉秋宅	昭和12年2月、記念碑の工事に着手
M28.10.9	三疊溪	嘉義	旧兵營	昭和4年、記念碑の建立
M28.10.18	嘉義	安溪寮	王大高宅	昭和11年10月18日、記念碑の建立
M28.10.19	安溪寮	果毅後	張朝陽宅	昭和11年10月19日、記念碑の建立
M28.10.20	果毅後	湾裡 (善化)	林匏宅	
M28.10.21	善化	新化 (大目降)	鍾鏡清宅	
M28.10.22	大目降	台南	張紹芬宅 吳汝祥宅	台南神社

表4 台南州での進軍行程

創立し、翌年1月に台湾神社に付設され、管理された。この頃から、能久親王一柱の官幣中社を建立する機運が高まり、明治39(1906)年に就任した第5代佐久間総督から第9代内田総督時代まで当局に要請を行ったが、官幣大社台湾神社の祭神である北白川宮能久親王を他の官幣社の祭神に出来ないとの理由で難航した。

大正8(1919)年、御遺跡所の境内を拡張し、新たに台湾神社の別社を建立することになり、翌年に台南神社と社名を変え、大正12(1923)年6月竣工した。そして、命日である10月28日に台南神社は鎮座したが、この時点でも一神一官幣社主義の方針のため再三にわたる官幣中社の申請は認められなかった。

台湾総督府内務局が内務省神社局と10数回の交渉を重ね、また当時の伊澤総督自らも内務省内閣等と交渉した結果、「台湾神社の御由緒並びに台湾の

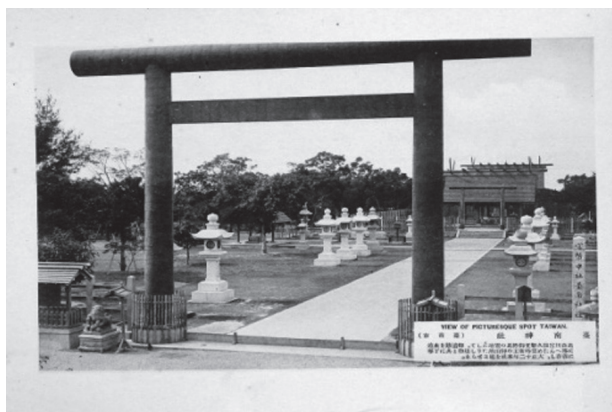


写真13 往時の台南神社(出典:神奈川大学海外神社(跡地)に関するデータベース)

特殊事情から見ても、また島民の熱情から見ても、いつまでも無格社として祭祀すべきのものではない」との見解もあり、遂に大正14(1925)年10月22日、台南神社列格の可決がなされた。それまでの無格社から官幣中社に列格したのは天長節(天皇誕生日で、大東亜戦争までは天長節と呼ばれた)の日である10月31日であった。境内拡張計画から悠に6年の歳月を要したことになる。

4 終わりに

以上、これまで10ヶ所に絞って北白川宮能久親王の御遺跡と神社造営の関係を見てきた。これらの神社は明らかに北白川宮能久親王が営舎、または滞在した場所であり、神社造営に関して、能久親王の「御遺跡」が深く関わっている事実が判明した。

これまで、神社造営に関して、「南向き(または東向き)」とし、「風光明媚な場所で山を背景とする」や平地の場合は「市街計画上の必然性」等が造営位置を選択する条件であるとされてきた。しかしながら、北白川宮能久親王の「御遺跡」がある場所に限っては、必ずしもこの条件が適応されなかった。

図1においてわかるように、北斗神社から能久親王の終焉の地である台南神社までの工程では不思議なことに「御遺跡」と「神社」の関係が全く資料として残されていない。嘉義も「御遺跡」のあった場所であるが、何故か嘉義神社造営の由緒としての記

載や報道がない。この点を調査するのが今後の課題である。

【参考文献】

- 北白川親王御遺跡 台湾総督府内務局 1935年
北白川親王御事跡 台湾教育会編 台湾教育会 1937年
北白川宮御征台始末 吉野利喜馬 1923年
台湾日日新報 台湾日日新報社 1898～1944年